SINAPIS

社会活動センター・シナピスは平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援します

月刊シナピスニュースレター

Vol. 102

2024. 11

年間テーマ　～あきらめない　平和への道を　ともに～

10 月 20 日に大阪高松カテドラルで開催された
INTERNATIONAL DAY のステージです

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、
愛し合うように願って平和の種をまき、
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

カトリック大阪高松大司教区
社会活動センター・シナピス

TEL/06-6942-1784　FAX/06-6920-2203
Email/sinapis@ostk.catholic.jp
ホームページ/https://sinapis.osaka.catholic.jp/

巻頭言

「真の自由」ということ

難民移住移動者委員会担当司祭

ホルヘ・ソーサ

自由についてのテーマは、非常に魅力的でありながら複雑です。この文章に興味を持つ読者を予測するのは難しいかもしれません。

このテーマに取り組むために、私は教会の信者に「自由とは何か」を尋ねました。彼女は、「自分の足に合わない靴を履いて半日を歩くのは難しいです。まして一生などとんでもない！」と言いました。私は笑いました。しかし、同時に、自由を持たない人々の痛みについて深く考えさせられました。

ベルギー王レオポルド 2 世戯画（1904年）

自由について語ることは、服従や奴隷制について語ることでもあります。今日では奴隷制について話すことは一般的ではなく、自由を失うことが何を意味するのか想像するのは難しいです。

しかし、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての衝撃的な写真が今も残っています。それらには、ベルギー王・レオポルド 2 世の支配下で鎖につながれたコンゴの人々が写っています。アフリカの大人や子どもたちは、十分なゴムを集められなかった罰として手を切断されました。

今日でも、様々な形態の服従が存在しています。その一つが人身売買ですが、それは目に見えないため存在しないかのように思われます。

植民地時代のコンゴの写真に戻ると、助けを求めて言葉を発せずに叫んでいるように見える奴隷となった子どもたちの目線に心を打たれます。そして過去と現在の自由を奪われたすべての人々について考えさせられます。それは利己的な社会の重荷を背負う無実の人々の叫びだと言えるでしょう。

神が彼らを助けなかった理由を考えることは難しいです。ある時、強制収容所についての講演を聞き、「神はどこにいたのか？」という質問に対して、「神は苦しむ者たちと共にいた、小さき者たちと共にいた」という答えがありました。キリスト、十字架につけられた者は、この社会の最も弱い立場にいる人々と共に存在しています。

親愛なる読者の皆様、ここまでお読みいただきありがとうございます。

どうか、私たちの社会の罪を背負っている無実の人々のために、アヴェ・マリアの祈りを捧げてください。

真の自由とは、私たちが愛されていること、尊厳を持っていること、そして神の子であることを発見することにあります。

大阪北地区　社会活動委員会の定例会の内容報告

2023.12 月～2024.8 月

大阪北地区社会活動委員会委員長　廣田　繁範

１．学習会（要約）

12 月度学習会　担当　竹延真治神父

２つの新聞記事を紹介し、自由に感想を述べる形をとった。

「PTSD(心的外傷後ストレス障害) 。「戦争体験が家庭内暴力を引き起こしている」（仮説）･･･虐待をやめられない母親。実は祖父世代の戦争体験の記憶が態度で次世代に引き継がれ 70 年以上を経て家庭内暴力の形で出ている。（祖父の家族に対する暴力の記憶により、自分が親になった時に、子に暴力を振るってしまう。）

「過酷な戦争体験の心の傷で抜け殻のような人間となってしまった父」･･･その苦しみは子や孫にまで続いていて家庭内暴力という形で現れている。

＜主な感想＞

- 戦争を作る国にしてはいけないし、それを子や孫の代に繋げてはいけない。
- 自衛官の海外派遣の PTSD も報告されている。
- ７０年前に原爆体験に突き動かされ、声を大にして反核・平和運動を推進する活動家であり詩人でもあったカトリック信者の峠三吉を思い起こした。
- 阪神・淡路大震災から PTSD が認識されてきたが、それよりも「戦争体験から来ていたものでもある」と感じた。
- 第一次世界大戦から認定されており、世界中で起こっている。

２月度学習会　担当　長谷川嘉美（大東）

戦時体制下での「奄美の信仰弾圧」から、第一次大戦後、軍部が民衆の支持を得て軍拡へと進んで行った。その中で上智大学事件が起こり、カトリック教会攻撃が始まる。奄美大島では軍部が島民の皇民化教育を徹底、外国人宣教師をスパイ容疑で国外追放し、カトリックの大島高等女学校を廃校とした。

戦争遂行の国策に相反するものは危険思想とされ、カトリック等の宗教は圧力をかけられた時代である。

＜主な感想＞

- コロナ禍でのバッシングに似ていると感じた。
- ＳＮＳでの過剰な発言にあるように、「顔を出さないと何を言ってもいいのか」と感じた。
- やはり過去に学ぶ事が大事である。
- 教育が大事。戦争に入る前から国策に合うように作りあげられている。
- 信仰の自由の中に生きる私達だからこそ、過去を学び、回りの状況に対してアンテナを立てておく事が大事である。

4 月度学習会　担当　吉澤由喜（大阪梅田）

フリージャーナリストの志葉玲氏講演会（ウクライナ、ガザ地区の現地取材から）

ロシア軍による住民虐殺、ロケット弾砲撃等による被害、その 1 年後のキーウ周辺の動物愛護団体、子ども達を励ますボランティア、激戦区の避難民。イスラエルによるガザ地区攻撃被害、ガザ封鎖の市民大規模デモとイスラエルの弾圧等の取材報告。

ロシアの戦争を続けられる力を奪うことが重要。経済制裁を続け国際社会でロシア包囲網を強化すべき。だが、欧米の矛盾を解消していくことが必要。（ウクライナ）

国際人道法を守れ、ただちに攻撃の中止。国連主導での平和を！（ガザ地区）

＜主な感想＞

- 国連が機能していない。
- 経済的に続くうちは終わりが見えない。（武器、弾薬等が無くならない）
- 大阪梅田教会としては非力ではあるが、現状を知り、できる支援を続けていきたい

6 月度学習会　担当　廣田繁範（今市）

『1 リットルの涙　難病と闘い続ける少女亜也』（著者：木藤亜也　幻冬舎文庫）

15 歳で脊髄小脳変性症という難病にかかり、意思の疎通が出来た 20 歳までの日記などを綴った書籍（著者は 25 歳で永眠）」をもとに、障がい者の方とのふれあいを通じての分かち合いを考えた。

脊髄小脳変性症とは：手足や言葉の自由を徐々に奪われながら、最後には体の運動機能を全て喪失してしまう難病。現在でも有効な治療法はない。

＜主な感想＞

- 障がい者は老後の自分自身と捉えて接したい。
- 車椅子に乗っている方に「楽で良いですね」と言ってしまいそうだった。
- 障がい者の待遇に対して「逆差別」と批判する人がいる。
- 駅やその周辺はまだまだバリアフリーになっていない。

8 月度学習会　担当　山本真理（香里）

『闇と光のさなかを・・・』、『歳を重ねる霊性』（カルメル会中川博道神父）から

自分に洗礼を授けてくださった司祭の病床を訪ね、話を聞き高齢者についての考えを書かれたもの。

高齢者になる準備と覚悟（豊かな高齢者になるためには？）

競争社会の中で高齢についての歪んだ概念（生産性という物差し視点では無く、ライフサイクル視点から壮年期の猛々しさを中心とせず、人生の後半の意味をもっと大切にする）。

＜主な感想＞

- 出席者が、老後に差しかかった年齢の方が多いので、教会活動と自身の老後が主な話題となった。

2. 報告事項　：　教区のつどいや会議に参加した場合はその報告
3. 検討事項　：　教区催しの進捗確認など
4. 各小教区からの報告（多岐にわたるので割愛）
5. シナピスからの報告

以上

大阪北地区・社会活動委員会の定例会で「学習会」を開くようになった経緯

担当司祭　　竹延　真治

大阪北地区・社会活動委員会の定例会の中で「学習会」を開くようになった経緯について「提案者」である担当司祭から、箇条書きで少し説明させていただきます。

① きっかけは、大阪北地区宣教評議会で、「平和旬間は、地区全体ではなく各小教区単位で行う」ことを決定したことです。
平和旬間行事を企画し、北地区宣教評議会に提案することに地区社会活動委員会定例会のほぼ全エネルギーをかけてきた私たちにとって、平和旬間行事の開催が小教区評議会の担当になったことで、これから定例会の時間を何に使ったら良いのか分からなくなったように思います。

② ここで、この時間を埋めるために平和旬間に変わるイベント（例えば、地区社会活動委員会主催の学習会）を考えても良かったのですが、「今は社会活動委員会のメンバーは外に向かうときではなく、内面を充実させる時、自らのエネルギーを蓄積する時だ」と私は思いました。
社会活動委員会のメンバー一人ひとりの中に、「自分が人に伝えたいはっきりしたメッセージ」が無ければ、イベントを開催しても人には伝わらないからです。

③ そのために、北地区社会活動委員会メンバー一人ひとり、今自分が抱えている問題や、心を動かされる事柄を少しずつ深めて勉強し、定例会一回につき一人が発表（input）し、それを聴いた他のメンバーが感想を分かち合うというやり方で、学び合うのが良いのではと思いました。
これならば、講師は要らないし、他のメンバーがどんなことに関心があるのかも興味津々で、メンバー同士の絆を深めることにもつながりそうです。

④ また、メンバー一人ひとりが取り上げるさまざまな社会問題の中から共通の根のようなものが見えてきたらいいなあと思います。そのような共通の根とどうかかわっていくのかが、社会活動の重要なテーマだと思うのです。

⑤ この学習会で取り扱うテーマの中から、小教区平和旬間の開催に役立つものや、地区開催の学習会のテーマになるものも見つかるかもしれません。

学習会「看る時、看とられる時　―介護の現場の体験より―」に参加して

六甲教会　　井川　伸子

山内　保憲神父

9月22日（日）11時15分より、カトリック六甲教会のイグナチオホールで、「看る時、看とられる時」というテーマで、当教会の社会活動部主催の学習会が行われました。

多くの人に関心があるテーマでしたので、ホールは160名の来場者で埋め尽くされました。

講師は、上智学院カトリック・イエズス会センターに勤務されている山内 保憲神父さんで、昨年10月まで6年間「イエズス会ロヨラハウス」という、言わばイエズス会神父たちの老人ホームのような施設の修道院で、介護のお世話をされてこられました。

1963年には100歳以上が153人しかいなかったのに、高齢化社会になり、2024年には9万人に達しているそうです。

ロヨラハウスでの平均年齢が92歳という共同体の中で、当時40代であった山内神父さんが介護のお仕事をされるのは並大抵のことではありませんでした。

認知症が進み、怒りっぽくなる神父さんに対して扱い方の難しさ、病院に連れて行き、待合室で長いこと待たされ、帰ってくるまでのほぼ半日以上の付き添い、末期に延命治療のことで、本人と家族、そして医者とのやりとりを目の当たりにしての難しい決断のやりとりの現場体験、夕方になると修道院をフラッと飛び出してしまう高齢神父への対応‥‥など数多くのご苦労があったにもかかわらず、ご自分の苦労を超越して、いとも楽しそうに会場に笑いの渦が湧くほど、ユーモア溢れたお話をされ、「話術の才能に富んだ神父さんだ」と感じました。

ロヨラハウスの神父さんたちは、かつては、偉大な教授、偉大な院長、才能あふれ、輝かしい風格に恵まれ、人々から慕われて大切にされてきましたが、それが今、身体も衰え、頭もボケ始め、「見るべき影もなくなっていく」。

私たちもいずれは老いていき、昔の若い時のように健康で輝いて何でもできるわけではありません。

小さくなっていく自分のみじめな姿、暗闇に入って行くと思われますが、しかし、そこに、まさに惨めな姿で私たちのために十字架上で命を捨ててくださった救い主イエス・キリストの姿が現れ、小さくなった私たちはイエスと共に歩み、神に近づいているのだということを山内神父さんの話から学びました。

聖書にも「あなたたちは世の光、地の塩である」と書かれていますが、この意味が本当に分かったような気がします。光は周りの人々を明るく照らし、最後には燃え尽きて芯になって消えていく･･･まるで、私たちの人生のように。地の塩も料理を引き立てるために少しだけでも役に立ち、やがて溶けて消えていく。まさに小さくなって消えていく私たちの人生のようです。

しかし、「消えていく」ということは、永遠の命への希望である、ということをこの学習会から学びました。

私たちは、「地上の眼差し」で見る時、健康でお金があって満足して暮らしたいという順調な時が続くことを求めますが、私たちは全員老いていきます。

何もかも失って絶望の逆境に陥った時にこそ、「信仰の眼差し」でイエスが歩まれた時を共に歩んでいるのだということを、学習会から学びました。

最後に山内神父さんは、介護体験から、介護される人に対して、「この人は病気になっているからもうダメだ！」と決めつけずに、ありのままを見つめ、寄り添い、その人の心の中に入り感じとり、共に怒ったり、笑ったりしてあげることも大切なのだなあ、という発想にたどり着いたそうです。

高齢化社会が進み、介護する人も介護される人も共にだんだん増えつつある社会ですが、この学習会を通じて、経済面でも、健康面でも順調な人生を歩んでいるかもしれない人々も、介護されて小さくなっていく人々の中に、光と塩を見いだし、互いに「信仰の眼差し」で歩んでいけたら素晴らしい社会になっていくのではないかと思いました。

障がい者委員会より

「合理的配慮ってなに？」　その２

吉川　康夫

それは、障害を持つ人が、障害を持たない人と同等の機会を得るために、事業者が提供しなければならない**対策**や**設備のこと**です。

これらの具体的な対策や設備の提供は、2024 年今年 4 月 1 日から努力義務ではなく、義務**とされています。**

（**参考**）「合理的配慮」の英語は“Reasonable Accommodation”です。

「納得できるお互いの調整」と訳すと分かり易いです。「無理をしなくてよいの**なら**、やらなくてもよい」と**いうことにはならないのです。**

（シナピス 10 月号の補足説明）①

内閣府のパンフレットから

● 合理的配慮は、障害のある人にとっての社会的なバリアを除去することが目的ですので、ある方法について実施することが困難な場合であっても、別の方法で社会的なバリアを取り除くことができないか、実現可能な対応案を障害のある人と事業者等が一緒になって考えていくことが重要です。

例１：コロナ禍では、政府や地方公共団体の人が、マスクを付けて話していました。
聞こえない、聞こえにくい人**は**話す人の口の動きを読み取ります。
多くの人･団体からマスクを外して話して欲しいとの要望があり、⇒その様になりました。

例２：生まれつき難聴の人や高齢者になって難聴になった人にとって、小さな声や雑音の中での声、そして早口で話されると大変聞きづらいものです。
聞き取りやすい話し方や環境の配慮が必要です。

⇒設備面では、まずマイク設備と話し手のマイクの使い方を正しくすること。
また、自分の補聴器**でも**聞けるヒアリングループ（磁気ループ）や、専用レシーバーで聞く赤外線や FM の補聴装置の設置は効果的です。

⇒ゆっくり話すとミサの時間が長くなるとの心配があります。しかし無駄な時間を省き、お説教**やお知らせ**など大切なことはゆっくり話すなどの配慮を一緒に考えたいものです。

例３：見えない人にとって、点字は大切な情報手段です。**大阪高松教区では、「聖書と典礼」と全教区民宛の公的文書**は点字で提供されています。
しかし、小教区内の文書にまでは至っていません。どの文書を点字訳にするか、どの文書は音訳（読み上げ）してもらうか、献金袋に手で触れて分かる印などを使うかを点字を必要とする当事者と教会が話し合うのが良いでしょう。

☆内閣府のリーフレットをダウンロードしたい方はこちら
https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/sabekai_leaflet-r05.html
内閣府政策統括官（共生・共助担当）付障害者施策担当

障がい者委員会より

９月23日（月）に玉造カテドラルで開催された「病者・障がい者とともに歩むミサ」の堂内献金を寄付させていただいた「釜ヶ崎ストロームの家」について、当日配布の資料を転載させていただきました。

このミサで皆様からの献金を頂戴する釜ヶ崎ストロームの家について紹介させていただきます。また、献金につき改めてお礼申し上げます。

社会福祉法人釜ヶ崎ストロームの家は西成区釜ヶ崎に住まわれているアルコール依存症(以下ア症)を主とする精神障がい者の支援施設を運営しています。

法人は「のぞみ作業所」を母体として設立されました。

1973年に大阪市大病院(当時)の小杉好弘医師が釜ヶ崎で働くルーテル教会の宣教師ストローム先生に「お酒はひとりではやめ続けられない。ア症患者の釜ヶ崎での受け皿になってほしい」と依頼されたのが始まりで、元は「喜望の家」の中での事業でしたが今は独立して別法人になっています。

小杉医師は日本で初めて「日帰りでのア症の治療」をはじめられた医師です。当時は「入院での治療」が基本でしたが今ではこの「日帰りでの治療」が大阪から日本全国に拡がり「ア症治療」のスタンダードになっています。

利用者はお酒を飲まない生活を一日でも長く続けて元の生き生きとした暮らしを取り戻そうと毎日毎日頑張っています。

また、利用者全員が生活保護受給者で単身生活なのでスタッフは生活全般にわたり家族代わりの支援をしています。

釜ヶ崎ストロームの家　　高橋　郁夫（玉造教会）

【速報】　ガザ絶滅の前に「停戦」を！

カトリック夙川教会　西口信幸

「絶望の海の中」に希望が見えるのでは、と期待したのが錯覚だったかのように、10月に入り、もっと悲惨で厳しい現実が見えてきました。「ガザの完全イスラエル化」に向けて計画が実施されつつあるようです。報道されないまま、静かにおこなわれつつあるガザの民族浄化の動きをお伝えして、この事態に私たちキリスト者がどんな姿勢でいるのか、ともに考えたいと願っています。また、ヨルダン川西岸、レバノンでも同じようなことが起きていますが、ここで触れることができません。ともに今日一日が平和であるよう祈ります。
「ガザの歴史」、この１年に起きたこと、などは、後述の資料をご覧ください。

イスラエル軍によるガザ市民の大量虐殺、町の破壊が始まって１年が経ちました。ほとんどの町が焦土と化し、残った狭い場所でひしめく避難所への攻撃も止まらず、支援ルートも絶たれ、逃げることもできないガザの人たちは死と向かい合わせで暮らしています。
一日一日を「明日こそ停戦」と思うことで、絶望の中でも希望を持ち続けながら生き残った人々の心の糸が切れようとしています。

報道の関心がレバノンに向かう中で、ガザ北部では都市の殲滅が密かに進みつつあります。地域を包囲して爆撃をおこない、外に出る人にはドローン、狙撃、戦車が待ち受けています。
避難民となり北部にもどってきた40万人に3度目の退避命令を出ましたが、これはむしろ「強制移動」命令であり、１週間の猶予を与えた後、ガザ市を含むガザ北部を「全面的に軍事封鎖」するという２段階計画、「ガザ北部が地図から消し去られつつある」ほど「残虐行為の恐ろしいレベル」にまでエスカレートしています。10月に入って２週間で350人以上が殺されました。
北部への食糧は阻止され、食糧も底をつく中で餓死するか、出ていって殺されるか、選択を迫られる中、南部のキャンプの悲惨な実情を知る人たちの多くは閉じ籠っているそうです。
16日にアメリカの勧告が出て、援助物資を積んだトラック50台がエレズ検問所から入りましたが、包囲地域には届かなかったとの報告です。
檻に閉じ込めた家畜をゲームのように殺すのを私たちは今なお黙って見ています。

私たちは逃げることを拒否する。死は死だ。ここで死のうが別の場所で死のうが同じだ。
だから我が家で尊厳を持って死ぬつもりだ。

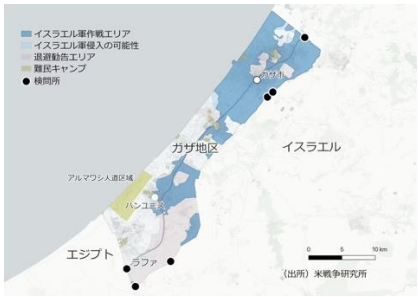
40万人の大避難

ガザ北部の包囲網

南部でも、6000人が身を寄せていたポリオ接種会場となるはずの学校など、病院、キャンプへの攻撃が日常化しています。10月14日の病院爆撃では４人が生きたまま焼き殺される動画がSNSで流れ、家族が見守る、痛ましい姿が映し出されました。それでもテレビは「ハマスの基地となっている病院へのイスラエルの軍事作戦により、数人の死者が出た。」としか報じていません。

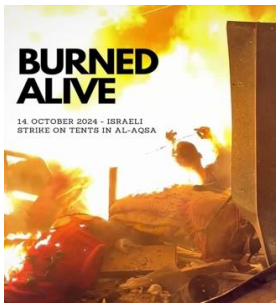
強制的に移動させられた170万人の避難民であふれかえる「人道エリア」ガザ南部の極度の過密状態（日本の人口密度の30倍）で「致死的な感染症が広まる危険性が高い」と、武器を供与しているアメリカが指摘しているほど、危機的な状況です。

ガザ南部「人道エリア」



アル・マワシ超過密難民キャンプ

生きながら焼かれる青年



冬の到来までに「ガザ全域であらゆるかたちの人道支援を急増」させなければ餓死、感染病死で子ども、病者、障がい者、妊婦と弱い人から死滅していくことになるでしょう。１日も早く、１日最低350台のトラックがガザ地区内に入れること、超過密「人道エリア」にいる人々が自由に外に出るようになること、人道支援が自由に安全に行えるようになることのため、「停戦」そしてイスラエル軍の「撤兵」しかありません。

国連機関、国際NGOはいつでも支援に向かえるよう、待機しています。

イスラエルの人権団体は14日に、「イスラエル軍が『**将軍たちの計画**』を静かに実行に移しつつあることを示す憂慮すべき兆候」があると警告しています。この計画は、ガザ北部のすべての民間人を強制的に移送し、残っているハマス戦闘員を包囲し、降伏とイスラエル人人質の解放を迫るというものです。北部地域が絶滅して人の住めない廃墟になることは予想されます。

NHKの報道では、アブラエー　　シュ博士の映画、「If I must die」の詩など、綺麗な悲劇として１年を締めくくるような報道が続いています。　　**終わっていません！！！**

ずっと生き地獄の中で人々は希望を捨てそうになりながら、それでも私たちが救いのための行動を取るのを待っていてくれています。私たちには諦めることは許されていません。

私たち市民が大事にしなければならないのは、すべての人の命、子どもの未来の平和です。

国家の権力が語る報道から一歩離れて、市民の声に耳を傾けましょう。

声を出しましょう。祈りましょう。支援しましょう。

【参考】　◎パレスチナの歴史と背景　池田教会平和旬間（資料請求はシナピスまで）

◎この一年ガザで起きたこと　夙川教会学習会（月報11月号）

https://www.youtube.com/watch?v=BzEAVQ_WOX8

◎今わたしたちにできること

Olive Journal　｜ 市民がつくるパレスチナ情報サイト

https://olivejournal.studio.site/

シナピスニュース　Vol.100

【緊急速報】（10月20日）　ガザ北部ジャバリヤで侵攻か？

カトリック夙川教会　西口信幸

先の【速報】を出した後、現地の報道からの情報が入らなくなりましたが、今日に入って個人のSNSに悲鳴のようなやりとりが出てきています。
北部ジャバリヤは最大の難民キャンプのある場所、元は40万人の人が住んでいました。封鎖された後、インフラが切断され、４つのキャンプと残っている３つの病院が侵攻を受けています。
南部に逃れた人も若者は射殺されているとの情報も、動けない傷病者や残っている人たちには壮絶な攻撃が行われているでしょう。
たった今届いた一つのSNSを紹介します。日本のSNSではないので、拙訳で申し訳ありません。
ガザで起きているかも知れないことに思いを馳せてお祈りください。

Omar from Gaza
@OmarHamadD
フォローする

Since yesterday, I have been trying to contact my friend in northern Gaza, but there is no signal.

A few minutes ago, he sent me a message saying: "My entire family is in the south, with you. I want to entrust them to you and ask that you stay with them. I am definitely, definitely dead—now, or an hour from now, or maybe later. I am running and gasping between the corpses in the streets. The bombing is everywhere. Our other friends have been arrested by the occupation forces, along with their families. After that, we lost contact with them. Pray for me, my friend."

This time, it is my tears writing, not my damned hand.

How can I read the will of my lifelong friend and beloved?

How can I witness all this agony and be unable even to comfort my friends with a word?

What am I supposed to do with these tears that are pouring so heavily from my eyes? Can they bring anything back?

Oh God, oh God, take us to you. Take us to you, God. Take me to any place you wish, but get me out of this world.

昨日から、ガザ北部の友人と連絡を取ろうとしているが、電波が届かない。
数分前、彼からこんなメッセージが届いた：

「私の家族全員が南部にいる。
家族全員をあなたに託したいので、
一緒にいてほしい。
私は間違いなく、間違いなく死ぬ
今か、今から1時間後か、あるいは
もっと後か。
私は街路の死体の間を走り、あえいでいる。
爆撃はいたるところで起きている。
他の友人たちは、家族とともに占領軍に
逮捕された。
その後、彼らとは連絡が取れなくなった。
私のために祈ってください。」

いま書かせているのは私の涙であって、私の愚かな手ではない。
生涯の友であり、最愛の人の遺書を、どうして読むことができようか。この苦悩を目の当たりにして、どうして一言も友人を慰めることさえできないのだろう。
私の目から溢れ出るこの涙をどうすればいいのだろう？
この涙で何かを取り戻すことができるのだろうか？
神よ、神よ、私たちをあなたのもとにお連れください。
神よ、私たちをあなたのもとへ連れていってください。
お望みの場所ならどこへでも連れて行ってください。

辺野古の報告集会に参加して

大森　雄二

8月18日、『辺野古は今～埋め立てを止めるために～』と題された集会（主催：Stop! 辺野古新基地建設！大阪アクション）に参加してきました。

定年前から十年にわたりゲート前での座り込みに参加されてきた宮崎史郎さん（全港湾建設支部）のお話は海上工事に関する専門的な部分も多く、難しいところもありましたが、監視活動の中身には驚かされました。

出入りするダンプカーの数と積荷、生コン車の数を正確に記録し、ゲート前だけでなく他の場所から見える情報と併せて、工事内容とその進捗状況を具体的に指摘されていたからです。そこから導かれた結論は、工事は遅々として進んでいない、できることをしているだけで、本当にやるべきことはできていない、でした。

「マヨネーズ並み」と言われる軟弱な地盤の埋め立てが本当にできるのか。本来なら、この軟弱地盤の海底調査を行ってから出されるべき、防衛省からの設計計画の変更申請について、知事が調査不足を理由に不承認とすると、国と県との間の法廷闘争に発展し、最後は国が県に代わって承認手続きができる「代執行」という形で押し切られてしまいます。

膨れ上がる工費（当初の2.7倍）と延びる工期（９年３か月）の試算はできても、それで収まる保証はどこにもありません。

そもそも普天間基地と比べて短い滑走路しか建設できないため、辺野古に基地ができても普天間が返還されない可能性さえあるとのこと。最後に宮崎さんは「十年で止められると思い座り込みに参加したが叶わなかった。あと五年、十年かかるかもしれないが、様々な力を合わせれば必ず止められる」と締めくくられました。

次に、カヌーに乗って海上で抗議活動を行う小野純一さん（辺野古ブルー HYOGO）がお話しされました。「カヌーが現場の海に繰り出したところで何ができるのか。工事の妨害をして、数時間でも数日でも工事の進行を遅らせることができればとの思いで参加しています」と淡々と語られる姿に心を打たれました。

当初の、沖合を埋め立てて新基地を造る計画は、粘り強い海上行動によってボーリング調査の中止に追い込まれ、キャンプ・シュワブ（名護市と宜野座村にまたがる米軍海兵隊基地）の沿岸を埋め立てる現在の計画に変更された経緯があります。一度は辺野古の海を守った海上行動ですが、この変更によって、抗議活動は難しくなってしまいました。それでも、最深90 メートルにも及ぶ巨大な埋め立て工事に、素手のカヌーで反対の意思を示し続ける小野さんたちの姿と言葉に、なぜか福音的なものを感じました。

最後に、ジュゴンとサンゴを調査している松島洋介さん（ジュゴン保護キャンペーンセンター）が紹介した言葉を記します。

「人間の事情と営みで、サンゴもジュゴンも死滅に追いやられているように見えるが、子孫にまっとうな環境を残そうと考えない種は人間くらいではないだろうか。そんな人間がサンゴやジュゴンよりも永らえるとは思えない」。

映画「戦雲（いくさふむ）」を観て

大森　雄二

「また戦雲が湧き出してくるよ、恐ろしくて眠れない」（石垣島の抒情詩とぅばらーまの一節）、と山里節子さん（いのちと暮らしを守るオバーたちの会）が歌う場面からこの映画は始まる。

基地負担の軽減を求める沖縄の人びとの怒りの声に対する、日本政府の答えを見せつけられた「戦雲」を観て、そんな気がしてたまらなかった。

台湾に近い西から順に、与那国島、石垣島、宮古島で、ここ十年の間に、自衛隊基地の建設が急ピッチで進められている。具体的には、ミサイル部隊の配備と、そのミサイルと火薬を収納する弾薬庫の大増設。沖縄本島には、島々に配備されたミサイル基地統括本部が完成した。

「戦雲」は、島々の豊かな自然の中で暮らす人々の日常と、基地建設のために行わざるをえなくなった反戦活動の様子を描きながら、人々の心の葛藤まで丁寧に伝えている。

はじめは圧倒的だった基地建設に反対の声が、次第に容認と諦めの声に押され、分断された地域の住民の切なさ。島の未来は自分たちで決めたい、と立ち上がった若者たちが集めた署名（住民投票の実施を求める条例案）に対して、その条例案を否決したうえ、石垣市の「自治基本条例」から住民投票の条文を削除した自治体の横暴。基地前での監視活動を少人数ながら毎日続ける両親の姿を見て、内気だった娘さんが市議会の補欠選挙に出て当選し、先輩議員たちにどんなに相手にされなくても、基地に関する質問を続ける姿など、心に刺さる場面が連続する。

昨年９月、与那国島では町役場による「島外避難にかかる島民との意見交換会」が開かれた。出席した与那国沿岸監視隊長は「沖縄戦の教訓も含めて、一番優先しなければならないのは町民の命。そのことはこの場でお約束したい」と話し、参加した町民は「私たちは助けてもらえる状況にないんじゃないか。一番命を粗末に扱われている国民なんだということを町民に感じてもらい、理解してもらいたい」と話す。

宮古島で抗議の声をあげ続ける楚南さんは言う。「黙って、しょうがないさ、になることは絶対にないと思う。やめる理由がない。山里節子さんが言ってるとおり、まだここが戦場になっていなくて、まだ誰も死んでないから、諦める必要はないでしょう、って」。

命と暮らしを守るため、声をあげ続け、体を張り続ける人々の列に、私はどんな風に加わることができるか。何も知らなかった自分を恥じ、まずは知ることから始めたい。

最後に、公式パンフレットから安田菜津紀さん（フォトジャーナリスト）の言葉を紹介したい。――この映画が問うのは、「沖縄の島々なら押し付けてもいいだろう」と要塞化を進める国以上に、「ヤマト」に暮らし、「押し付けても許されるだろう」と国に思わせている私たち自身ではないか。

シナピス事務局こぼれ話

ビスカルド篤子

10 月 2 日　行列のできるシナピス歯科ルームの誕生

歯は痛みがあれば歯科に行くしかありません。自立を禁じられている仮放免の人にとって歯の治療をどうするかは深刻な問題です。

シナピスニュース 9 月号のこの欄で「入管で 7 本も歯を抜かれて顎がへしゃげた人」のお話を書いたところ、「診ましょう」と、ある歯科医さんが声をかけてくださいました。

歯科医の新庄文明（ふみあき）さんと妻の幸子（さちこ）さんです。幸子さんは、社会運動面でも芸術面でも広くご活躍される方で、数年ぶりに彼女の笑顔に再会できた私は懐かしさと嬉しさでいっぱいになりました。

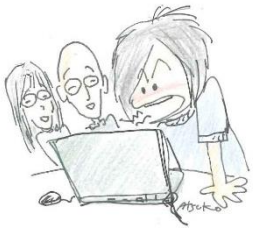
新庄先生はシナピスに到着されると、「椅子とコップと水とタオルがあれば診ますよ」と仰って、持参された道具を取り出し手際よく次々に仮放免の人たちの歯を診察してゆかれました。今日診てもらった人の中には、長年放置しすぎて歯茎の奥まで蝕まれてしまい、痛みすら失っているケースもありました。歯科医がそばまで来て診てくださらなければ、この先もずっと放置したままだったことでしょう。

新庄先生はこれから定期的にシナピスへ通ってくださることになりました。治療の過程で費用のかかるものは、本人たちが最低限度の経費を先生にお支払いする約束をしました。

10 月 11 日　15 分で見つかる通訳探しネットワーク

日本語も英語も通じない中国人難民夫妻が到着しました。釜ヶ崎で野宿していた夫婦を見た同国人の難民申請者たちが手を差し伸べ、夫婦は心ある日本人に一時宿泊施設で保護してもらい、シナピスを案内されたということでした。

しかし夫妻は玉造の活動センターへ来たとはいえ、全く意思疎通ができません。これでは「こんにちは。ほんじゃサヨウナラ」と手を振るしかありません。そこで私は電話をかけまくって中国語でコミュニケーションの取れる人を探しました。15 分後、なみはや教会から愛徳カルメル会の Sr.熱田に繋がりました。中国語を使える Sr.熱田は、ちょうど外出前でしたが「30 分だけなら」と快諾してくださり、私はすぐにパソコンを取り出しました。



Sr.熱田は心得ておられ、オンラインで繋がると、挨拶もそこそこに通訳を始めてくださいました。通訳含めて 30 分ですから、正味 15 分で取り急ぎ聴くべき要点をつかまなければなりません。きっと Sr.熱田も「時間がないから要点だけ」と夫婦に促してくださったのでは、と推測できるほど、中国人夫妻とのやりとりはテキパキと進みました。

お見事、Sr.熱田！…も、そうですが、ひょっとすると、中国人夫妻にとっては、気色ばんでつんのめって喋りまくる、そばのアツコと名乗る女が怖くて、テキパキ返答せざるを得ないだけだったかもね。

活動へのご支援ご協力を
よろしくお願いいたします。

電化製品、お米・乾麺・調味料、
日持ちのする食料品、外国語の聖書の
ご寄付をお願いします

＊比較的新しい家電製品やミシンなど
＊日本語の聖書は不要です

お電話をお待ちしています！！
☎06-6941-4999

シナピスホーム（カフェ）
11 月の予定

カフェ：2 日、9 日、30 日
ランチ：16 日

★土曜日の 13 時頃～16 時頃
★ランチは要予約
（電話 06-6942-1784）

◀◀◀ **HP はこちらから**
https://sinapis.osaka.catholic.jp/

ニュースレター配布停止ご希望の方は
シナピスまでお知らせください。

あとがき

今年の『シナピスニュース』では、各地の社会活動委員会が主催した学習会の報告をよく取り上げました。コロナ禍の間は何もできなかった反動でしょうか、社会の問題に取り組んでいこうとする動ききが力強く復活したように感じます。

それぞれの報告を読んでいると、準備された方々の真摯さや、困難な道を切り開いていこうとする意思の強さを感じます。取り組むテーマも多様です。ウクライナやガザでの戦争の現況や背景、戦争がもたらすPTSD、障がい者の抱える問題、グリーフケアなど。今この社会に生じているさまざまな問題に触れ、その原因を掘り下げ、気づいたことや感じたことをわかちあうなかで、まず自分が行動できることを見出したりする機会となりました。

先日の International Day の多言語ミサで、酒井司教は福音宣教について「キリスト者らしく精一杯生きて、いま自分にできることをすること」と話されました。社会のさまざまな問題に触れて感じたことや、「おかしいな」と思ったことを身近な人たちに伝えてみる。自分が話したほんのひとことが、誰かの気づきを促こともあるでしょう。小さな波紋がどんどん広がっていくことが、社会の福音化につながっていきそうな気がします。（いたる）

▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

◆広報活動
・教皇メッセージ、司教団メッセージ等
社会活動の指針の伝達
・読者と教会内外の社会活動をつなぐ
機関誌としてシナピスニュースを発行

◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携
◆学習会研修会の企画
◆こども基金
世界・日本のこどもたちへの援助
◆日本カトリック司教協議会との連携
正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、カリタス、部落差別人権委員会に委員を派遣
◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ
◆難民移住移動者支援
難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル
☎ 06-6941-4999

アクセス
〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22
カトリック大阪高松大司教区事務局内

●公共交通機関ご利用の場合
JR 森ノ宮駅より　約 1000m
地下鉄中央線森ノ宮 2 番出口より　約 800m
JR 玉造駅より　約 1000m
地下鉄長堀鶴見緑地線玉造 1 番出口より約 800m
●車でお越しの場合
阪神高速１３号東大阪線法円坂出口
法円坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいします
□郵便振替　00960-7-61419
加入者名　カトリック大阪高松大司教区
代表役員　前田万葉
□三井住友銀行　玉造支店　普通　9401958
カトリック大阪高松大司教区　シナピス
代表役員　前田万葉
□オンラインはこちら　➡➡➡